

13 中国十六世紀以前の瀉血療法

○友部¹⁾ 和弘・真柳²⁾ 誠

かつて日本で行われた瀉血療法の実態を、これまで曲直瀬道三(二五〇七〜九四)『啓迪集』と江戸前中期の湯液医家の治験集から調査検討してきた。

一方、日本の各時代で受容されていた中国の瀉血療法は如何なるものだったか。これを江瓘一五〇三〜六五撰『名医類案』(二五九一成、エンタプライズ刊『和刻漢籍医書集成』収載)で調査した。本書の二〇五門には、約一九〇名の医家の治験計二三八八例を載せる。そこに記載された瀉血治療の分析結果は以下のようなだった。

① 記載病門…症例数…瀉血記載回数

疔瘡…三・六、脚氣…咽喉…各三・三、大頭天行・首風・癘風・胎毒…各二・二、腰痛・目…各一・二、解休・火熱・痰・瘰・舌・瘡・痛風・瘡瘍・背癰・腦頂疽・臍

風・赤丹・中毒…各一・一の計二二病門、三三治験、三七箇所。この二二病門は全病門の約一〇％に相当し、三三治験は全症例の約一・四％に相当する。

② 瀉血単独の記載病門…治験数

脚氣…三、目・疔瘡…各二、大頭天行・火熱・痰・首風・腰痛・舌・癘風・瘡瘍・臍風…各一の計一六例だった。瀉血記載三七箇所の約半数が瀉血単独治療である。ことは、江戸前中期の湯液医家が湯液の補助で瀉血をしていたのといささか異なる。

③ 瀉血治験の出典・治験者…治験数

羅謙甫・薛己…各七、李東垣・張子和…各四、出典・治験者不明で患者名のみ…二、『葉氏録驗方』『三國志』・淳于意・秦鳴鶴・呂元膺・朱丹溪・郭(玉?雍?)・江応宿・出典治験者患者名不明…各一。

瀉血を多用した張子和・李東垣・羅謙甫は金・元、薛己は明の医家である。しかし紀元前の淳于意から一五九一年に『名医類案』を最終整理した明の江応宿までわたっており、明瞭な時代的傾向はみられない。

④ 瀉血の針具…記載回数

三稜針・砭…各四、針・銚針・鉞刀…各二、砭針・砭石・草莖・鉞針・銚針・鉞針・鉞針・銀針・小刀…各一の計一四種…二三回。以上のうち一般の針具とみなしてよいのは針・鋭針・銀針の三種四回で、瀉血には専用の針具を用いることが多かつたらしい。

⑤ 瀉血部位…病門

〔患部〕腫上…大頭天行・脚氣・舌・癘風、腫上・喉間…咽喉、瘡心…疔瘡、舌患処…中毒、患部？…背癰・脳頂疽・毒胎・赤丹。

〔非患部〕手足…解体、巔前眉際…火熱、百会…瘰、頭・百会・脳戸…首風、足太陽・少陽血絡…腰痛、指爪甲端・脚氣、上星・百会・攢竹・絲竹空・鼻中…目、足少陰脈・舌下中脈…瘡、委中…通風、面・額・頤…癘風、牙齦水泡点…臍風。

以上のうち具体的に名称を挙げる経穴は百会・脳戸・上星・攢竹・絲竹空・委中で頭部に多く、経脈は足太陽・少陽・足少陰脈で足のみという傾向がみられた。しかし全般的には非経穴・非経脈部位、患部の瀉血が多い。

⑥ 採血量…病門

幾斗に盈つ…舌、約（一）升許…目、多…半升…脚氣、三合…通風、二合…火熱、出血大過…瘡、大いに血を出す…癘風、多…背癰、半合…咽喉、二盃…瘰、二盞許…毒胎、鮮血を出す…碗許…疔瘡、少血…首風、露珠の状…大頭天行・痰、血一点許…中毒。

このように相当大量の採血もあるが、大頭天行・痰・中毒では少量の採血を強調している。

⑦ 無効か有害な治験の記載病門…例数

疔瘡…四、脳頂疽…一。この五例の記録は、瀉血を危険な療法と認識した臨床家もあつたことを示唆する。

以上の分析結果、瀉血は一五九一年以前の中国でも稀な療法で、適応疾患・治療部位をかなり限定し、専用針具を用い、一般には多量採血だった実態が知られた。これは室町末期〜江戸中期と同傾向だが、治験の約半数が瀉血単独だったことは日本の傾向と相違する。他方、無効や有害だった治験もあるのは、瀉血が限定された疾患に有効と認識されていたらしい実態と表裏をなすだろう。

① 北里研究所東洋医学総合研究所・医史学研究所

② 茨城大学人文学部